

シカゴ社会学の鍵概念

——トーマスとミード

後藤将之

1 シカゴ社会学の現代の特徴

アメリカで最初の社会学部がシカゴ大学に1892年に創設された事実は、それだけでは歴史的な意義をもつものにすぎない。今日なおシカゴで発祥したタイプの社会学が話題とされ続けていることは、少なくとも以下の理由によるものとみられる。第1に、シカゴ社会学は、最も初期に成立した、明瞭に相対主義的または相互主観主義的な社会認識に依拠した社会科学の理論化であり、単独の唱導者ではなく複数のメンバーによってその立場からの研究を展開した。第2に、にもかかわらず、シカゴの初期社会学者たちが共通して指向していたのは、いわゆる自然科学に範をとった「科学的な社会学」の樹立だった。

一般に、19世紀後半以後の時代において（その具体的な内実はどうあれ）「自然科学的」であろうとすれば、何らかの再現可能で測定可能な客観主義的な理論と方法認識を志向するものであり、そもそも「相互主観主義的な自然科学主義」という基本的な志向性自体が、ありがちな科学の一般的な立場からは、やや違和感を与えるものであろう。自然の法則性は、通例、客観的に存在している（その発見や承認が相互主観的に行われるにせよ）と想定されることが多いからだ。ただしこれは、自然科学主義が比較的素朴に信奉されていた19世紀において、それにならって確実な社会科学を創出しようとした、先駆者的な営為の限界だったともいえるだろう。

小論では、シカゴ社会学においてもっとも端的に相対主義または相互主観主義の傾向を示す概念化として、よく知られた「状況の定義」の概念を取り上げ、その初期の主導者たちの全般的な学的背景と関連付けつ

つ、この概念についての行動科学史的な整理と考察を行う。

2 ウィリアム・アイザック・トーマスと 「状況の定義」

シカゴ社会学の第2世代の研究者とされ、みずからも同社会学大学院にて博士号を取得（1896年）した最初の世代であるウィリアム・アイザック・トーマス（William Isaac Thomas, 1863-1947）は、むしろW・I（・トーマス）という省略形で呼ばれることを好んだといわれる。

トーマスにはいくつかの特徴的な概念がある。なかでもこんにち最も一般に知られているのは「状況の定義 definition of the situation」の概念だろう。この概念は、その縮約された表現「人が、ある状況を現実だと定義すれば、それは結果的にも現実である」というフレーズによって、「トーマスの公理（定理） Thomas Axiom (Theorem)」としても通用するようになっている。これをもう少し説明的に言えば、「その状況への参加者たちの相互主観的な意味づけによって、結果的に当該状況の意味が付与される（意味は事象や状況に内在的なものではなく、関係者の相互作用のプロセスによって合意され生み出される）」という、典型的かつ古典的な社会的構成論の発想である。この「公理」の出典とされる前出の短文は、トーマスとその二人目の配偶者ドロシー・S・トーマスの共著とされる『アメリカの子供』（1928）中で使用されており、ここから、「トーマスの公理」または「状況の定義」という概念の発生を、この1928年の著作に求める概論的な見解も、テキストブックなどで多くみられる¹⁾。

実際には、「状況の定義」は、トーマス社会学の中心的な概念というよりも、むしろ基本的な説明原理のひとつであり、少なくとも1917年の論文ではすでに中心的に援用されている。トーマスは、1917年刊行の会議報告論文「現代社会における第一次集団規範の存続と教育システムへのその影響」において、当時の教育問題を自身の立場から論じる中で「状況の定義」概念を広範に使用していた。このことが重要なのは、一般にトーマスの社会学は、1918年に刊行開始される『ヨーロッパとアメリカにおけるポーランド農民』以後に確立したとみなされているからである（同書は、本格的なアメリカ実証主義社会学の最初期の成果と

して、「アメリカ社会学の独立宣言」と呼ばれてきた。同書がトーマスの代表作とされ続けてきたことは間違いない。実際には、トーマスの体系は、同書の以前から構想されていた。そして、この1917年までの段階では、『ポーランド農民』における共著者で、その冒頭の著名な「方法論ノート」に影響したとされるフロリアン・ズナニエツキからトーマスへの学的な影響も、それほど大きくなかったとも推測できる。両名の共同が開始されるのは1914年以後である。

知られるように、『ポーランド農民』は、在欧ポーランド人とポーランド系アメリカ移民の龐大なパーソナル・ドキュメントとライフ・ヒストリーを収集採録し、それを分析して、ポーランド系移民のアメリカ社会への文化同化の過程を検討した、全5巻2200頁を超える大著である。データの収集だけでも10年以上を要したといわれる。その調査の過程で、トーマスは1913年にヨーロッパでポーランド人学者ズナニエツキと出会い、1914年に（トーマスは関知していなかったとされるが）渡米したズナニエツキを、当初は調査協力者として、後には共著者として採用する。両者の知的共同において、ズナニエツキは、実証材料を熱心に集め、知識をもったインフォーマントとして働き、有意味な調査協力者だった。ただしトーマスは、『ポーランド農民』に着手する以前から自分の基本的なアイデアを発達させており、それをたえず改訂しつづけていた。それはズナニエツキがシカゴに到着する以前だった（この段落はJanowitz, 1966による）。

以上からみると、1917年段階で、ズナニエツキからトーマスへの影響関係が全くありえなかったわけではない。両者は1913年には出会っているからだ。ただし本格的な共同は渡米後の1914年以後のことだろうし、それはまた、少なくとも短期間のものであったとみられる（両者はその後も良好な関係を維持したといわれるが、『ポーランド農民』刊行以後は再度共同することがなかった）。

小論では、この1917年論文をコーパスとして、システムティックに語の使用例を抜き出す作業を行った²⁾。その結果なども援用して、以下に「状況の定義」概念の背景と使用について考察する。だが、その前に補足しておくべきことがある。第1に、トーマスの専門的な職歴全般にかかわる特徴と学説史的な問題。第2に、そのような彼の社会学の基本的な傾向である。

2-1 限られた経歴情報と過大なスキャンダル報道

トーマスの公開された確実な知的経歴については、最小限度の形式的記録が残されているにすぎない³⁾。これは、一学派を（あるいは一国における一学問領域を）形成する主要な影響力だった現代人としては、きわめて例外的なことである。

シカゴ大学出版局の「社会学の遺産」叢書を編集し、トーマスの巻も担当したモリス・ジャノヴィッツはこう記している。

「W・I・トーマスについて、入手できる伝記材料はほとんどない。小さな自伝的断片がひとつだけである。たくさんいた彼の学生は、誰一人としてその社会的な人物紹介を書こうとしなかった。シカゴ大学のアーカイヴには、数通の事務上の書簡があるだけである。そのアーカイヴィストが記録に記しているところでは、他の学問での同世代人のものと共に配置されるべく、W・I・トーマスのファイルを収集しようとした探究と方法は、いかなる独自の書簡集も生み出さなかったという。この精神史の研究者にとって、ひとりの人間としてのW・I・トーマスの記録を消し去ろうという営為があったかにもみえた」(Janowitz, 1966: ix)。ほぼ同様の状況を、トーマスと当時のシカゴの小説家との関わりを検討した著作で、カペッティも述べており (Cappetti, 1993, Chapt. 4)、この状況が近年でもあまり変わっていないことが示唆される。このことはおそらく以下の2点から結果したものと考えられる。

第1に、トーマス自身に、みずからを内省したり、それを書き留めたり、保存したりしようという指向性がきわめて弱かったこと。「彼はあらゆる人間に関心があった。……W・I・トーマスに関心を持たれることが困難だったひとりの人間は、彼自身だった。……内省的で自己分析的な性質の伝記的な陳述を得ようと試みても、慎みというよりは単純な関心の欠如のために、傍へそらされた。彼の書簡は、このような情報のもうひとつの源だったはずだが、彼はそれを保管しなかった。社会科学における基本的な情報源としてのパーソナル・ドキュメントとライフ・ヒストリーを確立した人間は、それらの材料を残さなかった……。その人生の後年を通じて、トーマスの全著作が絶版であり、彼の論文も概して入手できなかった事実も、彼にとってはまるで深刻な懸念ではなかった。自分の最も考え抜かれた文章が、タイプ原稿や謄写版の形のまま

だったことさえ、彼は気にかけなかった」(Young, D., 1951: v)。W・Iは、基本的にこのような性格の人間だったわけだろう⁴⁾。

第2に、トーマスの名前を学説史上で不動のものとした『ヨーロッパとアメリカにおけるポーランド農民』(Thomas and Znaniecki, 1918-20)の刊行途中に起きた、彼をめぐるスキャンダルがある。この出来事についてはすでに各所で記されてきたが、カペッティには以下の詳細がある。

「1918年4月18日付『シカゴ・デイリー・トリビューン』紙の第1面に、〔第一次世界大戦のニュースに囲まれて〕次のような見出しが掲載された。『特報——トーマス博士と女性がループのホテルで逮捕』〔ループはシカゴ市ダウントウンの環状線およびその境界のこと〕。数行のこの記事では、あるカップルが結婚していないと疑ったホテルの支配人が、新法に応じてどのようにFBIに通報したか、またマン法に違反して偽って記名したかどで逮捕されたかが語られている。この記事は続けて、「トーマス教授は、広く論じられた書物『女性の心』の著者であり、彼の妻は、戦争反対主義の熱心な擁護者として知られ、フォード平和船事業のサポーターの一人である」と読者に知らせていた〔マン法 the Mann Act は、売買春関与などから守る名目で州間や海外への女性の連れ出しを禁じた法律だが、成人間の合意された交渉までが犯罪化されたこともあったという〕。……このスキャンダルが生じるや、トーマスの経歴は、突然、取り返せないほど破壊された。20年間奉職したにもかかわらず、彼は大学から解雇された——永続的な教授職は二度と得られなかった……シカゴ大学出版局は、『ポーランド農民』の刊行を〔全5巻のうち2巻までで〕即座に中断した」(Cappetti, *Ibid.*, Pp. 87-88)⁵⁾。

この事件にはその後の展開があり、彼の妻の平和活動への関与をFBIが監視していたことが一因だとの推測もあった。トーマスへの告発を裁判所は受け取らず釈放されたのだが、スキャンダル報道に対処する必要もあって、大学はすみやかにトーマスを解雇し、その名声は致命的に損なわれた。その後もトーマスは、研究基金を受けて影響力のある著作を刊行しつづける(1927年にはアメリカ社会学会会長にも選出された)が、正式の教授職に復帰することはなかった(事件の詳細は引用文献にもう少し詳しい。また、事件後まもない1921年の著作は、同僚の社会学者ロバート・E・パークらの別名義にて刊行されている)。名著とされる

『ポーランド農民』でさえも、「残りの3巻は、ボストンにある、もっと知られていないリチャード・G・バジャー出版社で印刷された」(Janowitz, 1966: vx)。

この経緯から、多くの後続するアメリカ社会学者たちが実際に参照できたのは、1927年にクノップ社から刊行された第2版の2巻本合本か、1958年にドーヴァー社から刊行された新版の2巻本だろう。後年の同書への言及は、これらの版が出典とされている場合が非常に多い。トーマスは、その学問的な影響力がもっとも強かった時期には、学生と直接に接触できなかったという。

そしてしかも前述のように、トーマス自身が自著の広い受け入れや持続的な利用可能性にはあまり関心を持たなかったらしい(ただしこのことは、事件の与えた心理的影響だったとも言われる)。シカゴ社会学の初期には、頻繁に言及されながら具体的な詳細にわたる引用や検討が少ない研究成果が多いが、トーマスの著作はその典型例といえるだろう⁶⁾。

作品の評価と作者の生活とはしばしば無関係でありうるし、後者とまったく独立に前者が判断できる場合も多い。とはいえ、学説史の研究者が、複数の学者の影響関係を特定しようとする場合などには、いっそう詳細にわたる「誰がいつ誰とどこで何をしていたか」の情報が必要になることもままある。上のようなトーマスの性格と突発事件は、研究者にとってある程度不都合なものであり、彼の業績の後世における再分析と再評価を困難なものにしているとも言えるだろう。

2-2 トーマス社会学の基本的な枠組

1951年に、ドナルド・ヤングを長とする社会科学調査評議会の「W・I・トーマスの社会科学への貢献に関する委員会」によってまとめられたトーマスの論文集(Thomas, 1951)の「イントロダクション」には、彼の「人間行動の研究をめぐる根本的な立場」が、編者フォーカートによって、要約的にまとめられている。同書が、トーマスの共著者でありトーマス夫人でもあった社会学者ドロシー・S・トーマスの提案で編集・刊行され、その編集委員会5人の中に、ドロシー本人と、トーマスに影響を受けたシカゴの社会学者ハーバート・ブルーマーが参加していたことを考え合わせると、これはある程度まで正確なトーマスの学問的意図の再現だと想定できる。それを以下に引用する。

1. 社会科学の目的は、人間行動についての検証可能な一般化を得ることである。
2. 人間行動は、一定の条件下でのみ起きる。それは、抽象的には「状況」という概念で代表されうる。
3. 人間の状況は、しばしば、観察者と行為者に共通する一定の要因を含む。物理的環境、関連する社会規範、そして他者の行動などである。このことの含意は、社会科学は、状況の、観察可能なまたは「客観的」な側面についての直接に得られた経験的な記述を要求する、ということである。
4. 人間の状況はまた、行為者のみにとって存在する一定の要因を含む。すなわち、彼らがどのように状況を知覚するか、それは彼らにとって何を意味するか、彼らの状況の「定義」は何なのかなどである。このことの含意は、客観的な側面と同様に、人間生活の主観的な側面もまた、調査者によって把握されねばならない、ということである。さらに、その主観的なものごとは、「欲求」「願望」「態度」などの概念で代表されるようなこれらの要因に帰せられた観念ではなく、現実の、直接に得られた性質において理解されねばならない。
5. したがって社会科学の方法は、人間生活の客観的および主観的（経験的）な側面の、両者の体系的な分析を与えるものでなければならない。
6. このような方法論は、全ての社会科学の連携的な営為を必要とする。そこには、ライフ・ヒストリーなど、データを得るための専門的な技法が含まれる。
7. このアプローチの目的は、行動の合理的なコントロールに必要なかつ有効な種類の知識を利用できるようにすることである。(Volkart, *Ibid.*, 2)

以上は、トーマスの主要な研究歴を通してあまり変化がなかったと想定される根本的な立場の要約である。そのためか、『ポーランド農民』などで多用され、トーマスの用語としてよく知られた「価値と態度」や「4つの願望」などの概念が出てこない。むしろ要約4において、その

ような類型化が疑問視され、いっそう直接的で経験的なデータに依拠することが強調されている（ただしこの部分は、編集委員のうち安易な概念化を強固に批判していたブルーマーの意向が現れた部分かとも筆者は推測した）。とはいえ、後年のトーマスはとりわけ「状況」的なアプローチを重視したという⁷⁾。

要約3と4において、人間の直面する状況についての、客観的および主観的な側面からの把握がそれぞれ必要だとされるが、いずれの側面についても、「直接に得られた first-hand」データの必要性が強調されるところが、シカゴ社会学に特徴的な志向性を示している。この部分が、具体的なヒューマン・ドキュメントやライフ・ヒストリーの重視につながる、「いわゆる」シカゴ学派的な実証主義の眼目だろう。しばしばその対極にあるとされるのが、ブルーマーのいう「変数分析」、ミルズのいう「抽象的な実証主義」であり、いずれも、事前に準備された標準的な調査票と質問項目に依拠した、形式的で統計的な質問紙調査などによる、操作主義的な社会調査手法を指している（Blumer, 1956, Mills, 1959）。

ちなみに、要約1は、それでも社会科学を（自然科学的な）「検証可能な一般化」として確立させたいという志向性を示しており、要約7は、そのようにして得られるはずの社会科学には、（自然科学と同様に）人間行動のコントロールにとって有効なことが求められる、としている。この要約1と7は、安易な概念化をいましめているかにみえる要約4と矛盾しかねないものであり、冒頭に記したシカゴ社会学の基本的な問題点ともいえよう。また、要約6において、このような社会科学の造出のためには、いわゆる学際的な協力が必要だと説かれていることも重要だろう。

ただし結局のところ、「トーマスは、自分の考えを統合するような方式で提示する最終的な総合を記さなかった。さらに、すべての種類の行動と社会組織を暗に説明するような形式的な学問分野も作らなかった。……けれども、人間の社会生活についての解釈的な体系と、そのような生活を理解するためにそれを研究する体系とは、別のものである。トーマスの体系は後者の種類だったが、期待されるほどには彼の著作中で明らかに示されてはいなかった」（Volkart, *Ibid.*, 1）。すなわちトーマスは、まず先験的な理論図式を構築し、それを適用してさまざまな現実を理論に照合して解釈する方法ではなく、すでにある現実を理解可能とするた

めに適切な概念を準備しようとした、ということである。この点もやはり、まず現実が理論に先行してそこにあり、仮説検証的というよりは帰納的に、それらの現実を把握しようとするシカゴ学派の実証主義に特徴的な指向性といえよう⁸⁾。

そして、以上のフォーカートの要約にも示される通り、トーマス社会学においてもっとも継続的に援用されているのが「状況の定義」概念であろう。この概念についてはすでに検討も多くある⁹⁾が、近年、トーマス社会学の成立期について新しい調査結果が報告されており、それに依拠した考察も可能となっている。

3 G・H・ミードとトーマスの関係

シカゴ大学における講義の実施記録や受講者記録に依拠して、シカゴの社会学者たちの相互関係を追跡しようとした研究は、ルイス&スミス (Lewis and Smith, 1980) などをはじめとしてときおり見られるが、近年、新たな調査結果が刊行されている。ヒューブナー (Huebner, 2014) では、G・H・ミードとトーマスの間の相互的な影響関係が独自の調査に基づいて検討されている。ここから、トーマス社会学へのミードの影響または相互の触発関係を、多少とも推定することができる。

まず形式的な事実だが、ミードとトーマスは生年が同じ1863年である。両者がシカゴで出会う以前に、両者ともドイツに留学しており、ヴントらの民族心理学に影響されている。ミードは1888年秋から1891年秋まで主としてライプツィヒに、トーマスは1888年から1889年までベルリンとゲッチェンゲンに、それぞれ滞在した。ただしトーマスは、すでに一度オーバーリン大学で英文学の教職に就いたのち、シカゴの大学院で社会学の学位を取りながら講師を務める(1893～1896年)。これはミードがミシガン大からシカゴ大へ異動した時(1895年)と重なっている。

ヒューブナーの調査 (*Ibid.*, Chapt.4) によれば、トーマスはミードの講義を3種類、履修している。2クォーターにわたる「比較心理学」(1894年秋および1895年冬学期)と、「心理学方法論」(1895年冬学期)である。これはミードがシカゴで最初に教えた2クォーターの講義であり、このテーマを直接に論じた最初の機会だった。デューイの手紙には、

1895年の「比較心理学」について、「数人の受講者しかいないが、その一人は社会学の講師であり、これまで目にしたもののうち最もすばらしいものだと言ってきた……彼は人類学の講義を教えることになっているが、それは実際のところは社会的発達の心理学だという」との一文があるという。ヒューブナーは続けて、このデューイの手紙中の「講師」がトーマス以外ではありえないことを、受講者記録にある学生を全て特定化することから強く推測している（ただしこの1895年講義については、トーマス自身によるものも含めて、速記録はまったく残されていないという。「ミードの著書」と呼ばれているもののほとんどは講義の速記録や草稿類を編集したもののだが、さすがに最初期の講義については速記録がみつからないということだろう）。

当時、ミード家とトーマス家は、同じ建物の一階と二階に住んでおり、季節のお祝いなどを一緒にしていたという。トーマスの息子がミードの講義に出ていたこともヒューブナーの調査が示している。これらから推測できるのは、両者がかなり親密な日常の接触を持っていた事実である。

ヒューブナーが以上のように報告している両者の相互関係であるが、それが具体的な両者の研究にどのように反映しているかについては、まだ十分に確定していない。お互いがお互いを講義や著作で引用している断片的な事実が判明している程度である。というのも、当時の社会科学の著作では、それほど詳細な影響源への言及や明示的な注記が行われていないからである。とはいえ、利用可能な情報から、一定程度の推測は可能である。以下、それを含めて検討する。

3-1 行為の段階論

ミードの行為論に、チャールズ・W・モリスが「行為の段階論 Stages in the Act」と呼んだ部分があり、モリスら編『行為の哲学』冒頭に、その草稿が採録されている（Mead, 1938: 3-25）。この議論は、生命体の行為には4つの段階（後年の指摘ではむしろ「局面」などが適切とされる）がみられるとするものである。

ミード研究の専門家であるボールドウィンの要約（Baldwin, 1986:55-56）によって示せば、「ミードは、行為を、4つの主要な構成要素からなる有機的な統合体として記述している。それらのいずれも他から独立ではない……個々の部分が、他と関連しあって、統合された有機的な全

体をうみだす〔つまり「段階」という表現とはやや異なる〕。……行為の4つの主要な部分とは、(1) 衝動 impulse、(2) 知覚 perception、(3) 操作 manipulation、そして(4) 達成 consummation である。これら4つは、イヌ、サル、人間といった多くの有機体にみられる」とする。そして、「空腹な時、イヌの空腹は食物を探す衝動になる。見回すことは、食物のためにイヌが環境を選択的にスキャンする選択的な知覚の一形態である。もし食物が見つければ、イヌはそれを操作する——おそらく口と前肢で引き裂く——それからイヌは、それを達成する(食べる) consume。操作という局面は、達成という目的のための手段である。……行為の4部分は、時として直線的に関連しているかにみえるが、実際には相互に浸透しあって、ひとつの有機的プロセスを形成している」。

このように要約される「行為の段階論」だが、実際にはミード初期の動物心理学の論文中で、すでに一定程度まで検討されていたものである。「動物の知覚について」(1907)においてミードは、英国の心理学者G・F・スタウトの議論を援用しつつ「行為の段階論」(になる議論)を部分的に提出している。ここで彼は、とりわけ行為に含まれる「操作」という局面の重要性を強調している。

「ここで生じる疑問は、さまざまな知覚の要素がそこに連合される不変の核 core は、どんな条件で生じるのかということだ」とミードは問う。そして「スタウトは、この核を、彼の用語でいう「操作 manipulation」に見いだした。彼のいう操作とは、われわれが自分で見たものを実際に扱うことはもちろん、……視覚刺激の結果として生じる、あらゆる接触経験を含んだものである」。そして、「スタウトの「操作」という用語の使用法から示唆されるひとつの区別とは、すなわち、知能的な行動は、それが知覚の段階に達したときには、遠距離感覚を通してやってくるものを、接触感覚に対して照合させることを含んでいる、ということだ」という。さらに、「この接触経験こそが……遠距離感覚を通してやってきた内容が照合される同一の核を与えるものである。同一でありつづけながら多様な経験に応答しているのがこの核である。この核こそが、われわれの物理的対象の知覚にとっての不可欠条件 *conditio sine qua non* なのだ。……われわれの周囲の対象は、固く見えたり柔らかく見えたり、大きく見えたり小さく見えたりする。だが、それを照合するものは、つねにそこに *there* 存在している」(以上の引用は Mead,

1907)。

以上について補足しておけば、ミードの行為論は、基本的にデューイの行為論 (Dewey, 1896) と同様の発想である。その要点は、「まず外部からの刺激があって、それへの生体の反応が生じる」とする刺激反応学説 (および一部の行動主義心理学) とは逆に、「まず行為しようとする有機体の衝動がある」ことを前提とする機能主義心理学的な発想である。環境と有機体との適応関係が乱れると、有機体の行動は抑止され、「衝動」の段階にいったん止まる。そこで、外部環境に対して再度適応的に「衝動」を発現させるべく、生命体による環境の選択的な「知覚」が生じる。これによって適切に選択された環境の部分に対して、「衝動」が外部的「行為」となって適応的に「達成」される。そしてここに、「操作」というスタウトの議論に触発された局面を導入して、知能的な行為における「操作」= 物的対象の構成過程、という部分を加えたものが、ミードによる行為の段階論だといえる。後年のミードの理論化において、行為における「操作」局面はきわめて重要な意味をもち、この局面において手 (またはその相当物) が物的対象 (として構成されるようになるもの) を操作する (いじる) ことを通して、遠距離感覚と接触感覚が照合されることこそが、一方では対象の存在を保証し、他方では自己の発生にひとつの根拠をも与えるとされる。「社会的な行為は「操作」の局面を含んでいる」 (Miller, 1973: 31)。

以上の議論は、物的対象が「そこに」存在するという假定において実在論的であり、手の操作によって他の感覚がそこに照合されることで、対象自体が構成されるという假定において関係論的な、実在論的な関係論の主張であろう。

3-2 「行為の段階論」から「状況の定義」へ

以上示したように、トーマスがミードの最初期の講義に出席し、その後もその影響を受けていたことは確実だろう。また、シカゴ大学での最初期のミードの講義は、動物心理学や比較心理学を大きく扱ったものであり、そこで展開された議論が、ミードの1910年前後の心理学・社会心理学の諸論文に結実したとされる (これも定説である)。ミードにおける行為論、とりわけ「操作」局面の重視についても、1900年代にはすでに刊行されており (上記)、それが形式化されたものが (とりわけ

『行為の哲学』に代表される 1930 年代における)「行為の段階」論だったとみることができる。

では、ミードのこの時期の行為論は、トーマスの「状況の定義」概念に影響していたといえるだろうか？

残念ながら、それを示す具体的な証拠を、筆者はまだ発見できないでいる。ただし、「行為の段階論」から「状況の定義」への移行または展開があったと仮定することは、必ずしも不可能ではないようにみえる。

まず、トーマスにおける「状況」とは、ミードにおける「問題状況」とほぼ同義であろう。つまり「生体と環境との適応的な平衡状態が失われ」(ミード)、すなわち「状況が未確定で定義されておらず」(トーマス)、したがって事物の意味が明瞭でなく、そのために「外部的な行為が当面、抑止・停止される」状態である。この段階で、ミードの个体発達論的な議論では、個人の内部で、遠距離感覚と接触感覚とが照合されることによって、対象が構成されるとともに、自己が発生する。トーマスの社会状況論的な議論では、参加者の間で、その未定義の状況が検討されることにより、状況の意味が構成されるとともに、その意味が参加者に共有されて、しばしば参加者のパーソナリティーがそれに従って社会化される。両者に共通するのは、問題状況に直面した際に、有機体が(個人としてであれ、集団としてであれ)とるであろう、その問題的な状況や対象に対する、熟慮的・検討的・定義的な認知的行為の局面(ミードにおける「操作」、トーマスにおける「定義」)が、その時点での行為プロセスに介在しているということである。

ここでは、ミードにおける個人の発達論的な「対象の操作」局面が、トーマスにおける集団論的な「状況の定義」過程へと読み換えられているようにみえる。両者は、議論の形式としてよく似ているように思われる。ただし、ミードにおいて(彼の議論のこの部分では)対象の操作を通した個人の発達論として提出されていた方向性が、トーマスにおいては状況の定義を通した集団的な社会化論の方向へと展開されているようだ。このことによって、ミードの当初の考察が持っていた「接触経験」を経験の核とする生理心理学的な傾向が、トーマスの考察にみられる社会心理学的な強調へと移行することになる。すなわち、ミードの発達論的な検討が、より相互主観主義傾向の強い社会学的な前提へと展開されたものと推定される。

以上の検討は、具体的な証拠をもたない推測に依拠した比較論にすぎない。とはいえ、これまでのミード研究やシカゴ学派の学説史研究においてもっとも大きな謎のひとつとされてきたのは、「いかにして哲学科の教授だったミードの講義が、社会学の学生たちに影響を与え、特徴的な社会学派を生んだのか」ということだった。たしかにミードの講義を受講した社会学の学生が多くいたことは、すでに受講記録の調査などから明らかになっている。とはいえ「具体的に、いつ、どのようにして」ミードの議論がシカゴ社会学に固有の前提へ変化したのかは未確定な部分である。

小論では、その他多くの可能性がありうることは認めた上で、トーマスによって、ミードの発達論が、社会集団の基本的な説明原理としての「状況の定義」論へと発展的に継承された可能性を指摘した。

4 状況の定義

以上のような背景をもつ「状況の定義」概念であるが、前掲1917年論文での扱いについて検討しておく。当該論文が掲載された書籍『教育に関する現代科学の示唆』は、現在では、やや疑問点の残る論文集である。第1に、編者の名前が明記されておらず、短い「まえがき」には「E. S. D.」とあるだけである¹⁰。編者が明記されていないため、文献目録などでも、寄稿者4名（Herbert S. Jennings, John B. Watson, Adolf Mayer, William I. Thomas）の共著のように記載されていることが多い。第2に、本書は、公立学校への知的関心を高めるために組織された「教育に関する共同委員会 The Joint Committee on Education」が実施した講演会の記録と考えられるが、本書からだけでは、その詳細が判明しない。とはいえ、以下に紹介するように、比較的短い講演原稿の論文であっても、多くの興味深い論点を含んだものである。

4-1 語の使用

同集中でのトーマスの論文は、総頁数39頁、単語数7800語ほどの会議報告である。その主張の概要は、現代社会においてもなお、社会学者クーリーの提起した第一次集団（家族など、第一次社会化のエージェント）の規範が作用して、子供への科学的な教育の抵抗となっているので、

そこからもっと自由になるべきだと説く進歩派の教育論である。この基本的な主張を、自らの用語である「価値と態度」、「4つの願望（本論では「4つの根本的な関心または願望」という不統一な表現が使われている）」、「状況の定義」に加えて、クーリーの「第一次集団」、ミードとしばしば結びつけられる「談話空間 universe of discourse」（p. 191）、そして「社会的世界 social world」などの概念を使って展開している。

コーパスを用いて出現回数を検討すると、「願望 wishes」は2回のみ使用され、うち1回が「4つの願望」の意味で用いられている。冒頭部で、「J・B・ワトソンが基本的な感情を3タイプに還元したように、自分は根本的な4つの願望を発見した」という指摘をし、ここで「4つの願望」を紹介する（p. 159）。すなわち「新経験 new experience」、「安全 safety」、「把握 mastery」「認知 recognition」への欲望 desire であり、これらの複合が人間の動機を作るとする。続いて、物理学的な還元主義には留保をつけながらも、感情の状態と知能の発達は、移動の能力と結びついていると指摘して、この点に、移動できない植物と、広域の探求によって食物と配偶者を探す動物との相違を見出す。そして「動物のことを、栄養を与える環境に到達する手段として非栄養的な環境を利用するメカニズムだ、と定義したのは、ミード教授である」と記して（p. 160）、ミードに言及している。前出ヒューブナーも注目していたが、このような形でトーマスがミードの議論を明示的に援用している。これ以外に、トーマスがミードに直接に言及した箇所は本論にはみられない。

トーマスは続けて、動物の支配的な関心は「追求の関心 a pursuit interest」だという。さらに、動物と人間におけるペア作りも追跡と捕捉の過程であるから、生殖活動もこの図式に入るとする（p. 161）。本論は、当時の進化論思想の影響から結果的に、1917年の論文としてはきわめて脱人間中心主義的にみえるものであり、以後も、ネズミの追跡行動と人間の科学者（パスツールを例としている）の科学的探求とをまったく併置して検討するなど、距離をおいた視点から、進化論的な各種生命体の行動カテゴリーの類似性を強調する論調で展開されていく。「動物であれ人間であれ、狩猟活動は、創造的な人間の科学活動と、疑いもなく同じであるのは明らかだと私は信じている」（p. 164）。続けて彼は、どんな活動も、このような「追求」パターンでないかぎり面白くないとし、社会分業によって問題が分割されては、追求への関心はな

くなってしまうと指摘する。この「追求」は、彼の用語法で言えば（「4つの願望」のうち）「新経験への欲望」と「把握への欲望」を体現するという（p. 165）。この論文では「願望」概念はまだ十分に形式化されていない。

これ以降しばらく、周囲に注意を払っている動物の行動が描写されるが、前出ミードの1907年論文とも通底する「知覚」局面での動物の行為が描写されているようにみえる（p. 165. 論調は似ているが、用語と表現はミードと同じではない）。

続いて、このような個体と集団の関係を述べる中で、「状況の定義」概念が論文中で最初に援用される（p. 167-168）。「したがって規範とは、構成員の活動への社会の判断であり、欲望が表出できる境界を示している。それは、我々が「状況の定義」とよぶ方法によって発達する。この状況の定義は、親による命令と禁止と情報提示という形式で開始され、称賛と非難のゴシップという手段によりコミュニティ内で継続され、学校、法律、教会によって公式的に代表される」。個人の社会化と社会統制の手段としての周囲の他者による状況の定義、という発想であり、多くのトーマスの著作中で行われた議論がここですでにみられる。

この部分を最初として、以下本論では、definition (s) が27回、define (defined, definer) が7回、合計34回用いられている。これらは若干数の例外を除き、ここに示した「状況の定義」概念の意味で使用されており、本論は何よりも「状況の定義」概念を頻用した論文といえる。ただし、正確に definition (s) of (the) situation (s) の構文で使用された事例は2か所のみであり、例えば1語の概念に比べて、語句使用の実態が把握しにくくなっている¹¹⁾。

この後、「要約すれば、どれほど恣意的ないかなる定義であっても、人々の習慣に具体化されたならば、正しいものとみなされる」（p. 169）とされ、この段階ですでに「トーマスの公理」に近い定式化がみられる。この部分から以後、本論は、いかに多様な文化において、当時のアメリカ人からみれば異なる状況が、正しいものとして当事者たちに受け入れられているかの記述的な事例の紹介と検討が続く。トーマスの収集した事例はかなり広範囲にわたるが、今日の視点からはやや概観的なものも多く含まれる。「日本のイエヤス下では、「期待されない行動」には死刑が課せられた。上司から叱責されたときに微笑まないこと、上司に挨拶

するときに大きく笑いすぎることは、ともに期待されない行動だった。笑いは注意深く制御されねばならなかった。奥歯を見せることは致命的だった」(p. 171)などは、興味深い指摘ではあっても、あまりに概括的な一般化であるようにみえる。そして、このような指摘の中に、「移民問題も犯罪問題も、主として内在的な精神的道徳的な問題ではなく、状況の定義によって確立された態度と行動規範の問題である」(p. 171)といった要約的な議論が置かれている。この部分は、現在の視点からすれば、単純にラベリング理論の先駆的な指摘だろう。

トーマスはさらに、状況の定義によって感情的に統制された集まりとして、各種の第一次集団を検討している。ここでも「状況の定義」の概念が多用されている。しかしながら彼は、定義が権威筋からの妥当化に依存しているという印象は与えたくないとして、個人が新経験を求めるのに対して、最大限の安定性を求める社会は、それと根本的に対立しているという (Pp. 176-177)。ここからトーマスは、支配的な状況の定義に完全に行動を適応させる「ペリシテ人 (実利主義者)」、定義から逃れようとする「ボヘミア人 (放浪者)」、そして状況を再定義してより高い社会的価値の規範を造り出そうとする「創造的な人」という3タイプを提出する (Pp. 179-180)。(ちなみに、創造的な人と犯罪者とは、どちらも規範の侵犯者ではあるが、結果が違ふと彼はいう)。「あらゆる規範は唯一の規範たらんとするので、それ以外は異常だとみなされる」(p. 186)。そして、教育者たちは、第一次集団の理想に学校を無意識に同調させており、そのため、多様性のかわりに画一性がカリキュラムで求められるので、教育と生活の間には絶えざる不協和がみられると指摘する。以上から、もし何か、熱中させる関心事で代替できるというのなら、必要とあれば、4年の学生生活で伝授された情報データをすべて大学生が忘れてしまってもかまわない、というデューイの言葉を引用している (Pp. 191-192)。このあたりが、まとまった講演としてのこの文章の中心部であろう。

以上示したように、トーマスの1917年論文は、短い講演記録の形式をとっているが、彼の「状況の定義」概念が集団の基本的な説明原理として広範に援用された論文である。部分的に「4つの願望」と「価値と態度」の用語も用いられているが、その表現は不統一である。トーマスの社会学は、後年において「状況」的なアプローチが強調されたと言わ

れているが、すでにこの1917年論文においてもある程度多面的な利用がみとめられるといえよう。

4-2 「状況の定義」の一般的な利用——今後の課題とまとめ

最後に、トーマスの後の著作との関連で、以上の考察を位置付けておく。

筆者の手元にある『ポーランド農民』冒頭の「方法論ノート」は、1958年のドーヴァー社版である（1918年版との異同は未検討）。このドーヴァー版「ノート」を、既述の方法にてテキスト・データ化した。ただし時間と資源の制約から、このデータについては誤認識などの修正は完全には行われていない。したがって、あくまで参考程度の経過報告にとどまるが、およそ以下の傾向が認められた。

当該論文は、頁数は86頁、およそ27000語からなる。1917年論文の約3.5倍の語の総量である。この論文中、definition (s) は19回、define (-s, -d) は6回、definition of the situation は2回、出現する。正確に definition of the situation の使われた回数としては1917論文と同じであるが、define系の語の出現回数は25回と、むしろ少ない。なお、一般的な用法も多いが、situation (s) の出現回数は53回と多くなっている。同様にして、wish (-es, -ed) については11回出現、ただし一般的な用法が多く、「4つの願望」の使用法は多くない。ちなみに desire (-d) は19回である。反対に、value (s) が139回、attitude (s) が212回と大量に出現している。これらの出現頻度の相違は、わずか1年間での変化ともいえる（ただし1917年論文がトーマス個人の講演原稿であるのに対して、1918年「ノート」の研究は、それ以前の10年以上を準備期間に費やされたもので、しかもズナニエツキとの共著である）。

ともあれこの変化が、トーマスにおける方法認識の変化を反映したものなのか、主題とされた現実に即応した結果なのか、共著者の影響によるものなのか、といった未検討の課題が残されている。このことは、これ以外のトーマスの単著および共著の大冊についても同様であり、さらに具体的な検討が望まれるだろう。機会があれば、これらの課題についても今後検討したい。

小論では、シカゴ社会学の概念「状況の定義」について、提唱者トーマスの学的な指向性と背景を含めて検討し、シカゴ社会学の基本的な問

題との関連で論じ、同時代人である G・H・ミードの理論との関連の可能性を指摘した。また、トーマスの 1917 年の講演論文のテキスト・データを分析して、概念使用の実態を検証した。

註

- 1) 筆者も過去の著作の中で、この概念の起源の曖昧さについて指摘したことがある（後藤、1999, 243 頁）。小論においてもこの問題は確実に解決されたわけではないが、これは同書での指摘へのその後の調査結果の中間報告でもある。ロバート・K・マートンに以下の指摘がある。「シカゴ大学での講義で、W・I・トーマスの同僚ジョージ・H・ミードは、明瞭に社会学的な表現で所見を述べていた。「もしある物が真実だと認識されなければ、それはコミュニティにおいて真実として機能しない」と〔この出典は、Mead, 1936, p.29〕。しかし、トーマスの定理とミードの定理は、明らかに異なる認知的な運命を経験した。実質的に自己証明的な方式で、ミードの定理は、それが講義における「口頭での公表」から印刷された出版へと死後に移行した後ですら、永遠の忘却におちいった。……トーマスの定理はそうではなかった」（Merton, 1995, p.383）。トーマスの定理の不正確な出典表示については、マートンの同論文に詳しい（Merton, *Ibid.*, Pp.383-385）。マートンは、この概念へのズナニエツキからの影響についても否定的である。小論は、上記マートンによるミード評価への一定の疑問としても想定されている。

なお 1980 年代中頃から筆者は、コーパスの分析のために、当時世界で唯一の大型計算機用コンコードダンス・プログラムだった Oxford Concordance Program (OCP) (1981 年公開) を利用した。1988 年以後はパソコン移植版の Micro-OCP を 2000 年前後まで利用した（このため筆者のテキスト・データは OCP 独自のフォーマットで作成された）。現在は macOS 上の AntConc などを試用中である。

- 2) 同様の方法を、筆者は G・H・ミードの刊行された著作のほぼ全てについて適用したことがある（Goto, 1996）。その具体的な手続きは、(a) 初出または広く準拠された信頼できる現物（の複写）を入手し、(b) その各ページをタイピストに逐次入力させるか、スキャナーで画像化し文字認識ソフトでテキスト・データに変換する、(c) 誤認識などを数度の読み合わせて修正し、頁番号、行番号、行中での語の位置などを維持したまま機械可読データ化する。この作業によって、頁中や行中における語句の位置をも維持したままで文献のデジタル・データ化を行う。100 年ほど過去の書物や雑誌の場合、流通した部数の絶対数がそもそも少ないうえ、残存するコピーには書き込みや汚れなどが多く、そのままでは文字認識できないこ

とが多い。この場合、各ページの画像ファイルをひとつずつ画像編集ソフトでレタッチするなどの作業も必須となる。このため、既存のデジタル・データ（新聞社のネットニュースやネットへの書き込みなど）をそのままテキスト分析する手法とは本質的に異なり、データベース作成にあたって原文の読解を含まざるをえない作業となる。なお、『ポーランド農民』初版は1500部が印刷され、1926年にはまだ売れ残っていた（Janowitz, *Ibid.*, lii）。

- 3) フォークアート編（Volkart (Ed.), 1951）の323～324頁に掲載された2頁のみの形式的な履歴が全てである。これ以外に、別の出所から集められた断片的な情報が多少公刊されているが、それらも形式的な記録や書類に記載された事項が中心である。
- 4) ただしこのことは、トーマスの人生が、彩りのない単純なものだったことを意味するわけではない。伝記的な具体的記述が非常に限られるため、対応に困難があるが、たとえば前出ジャン・ヴィッツによる編者序文のそこここには、抽象的な形容詞によるものだが、当時典型的だった控えめで内気な学者像とは全く異なり、人目をひく装いに気を払いながら、参加者および観察者として大都市シカゴの生活を体験していた、グルメでゴルフ好きの、論争的な知識人としてのW・Iのイメージが示されている。
- 5) この引用中、「広く論じられた書物『女性の心』の著者 the author of the widely discussed book 'The Mind of Woman' という部分について、知る限り、トーマスの著作リストに、この題名の書物はみられない。ただし、1908年の一般向け雑誌『アメリカン・マガジン』に、「女性の心」という数頁の記事を掲載している。
- 6) 重要なテキストは何らかの精密な読解や分析を必要とするが、トーマスの場合、主要な著作である『ポーランド農民』『アメリカの子供』などがいずれも大部である上に、その相当程度は当時の事例・実例の詳細な採録からなり、そこに著者の解説や分析が織り込まれて付加されている。そしてしかも、この手法こそが、トーマスにとって、前出のような実証的な社会科学の方法だった。アメリカの同世代人であっても、後続する研究者であっても、日本人の後世の研究者ならばなおさら、これら20世紀初頭前後の膨大な記述の中から、一貫した理論枠組や概念使用を抽出することは困難になる。トーマスの理論枠組が全体としてそれほど言及されていないのは、ひとつには単純にこのような要因によるものだろう。
- 7) 「『ポーランド農民』では、「価値」と「態度」の概念が、この〔人間行動の主観的な構成要素を理解するという〕目的を満足させていた。というのも、当時トーマスは、態度と社会的価値の相互作用の観察をとおして、社会変動の「法則」が発見できるだろうと考えていたからだ。しかし後年の著作でトーマスは、社会法則の探求を放棄し、「状況」および「状況の

定義」の概念を強調した。これらは彼の社会理論のまさに核心にあり、物理科学から人工的に引き出されたものではない、それ自らの現象に対して忠実な社会科学を作り出そうという、彼の試みを代表するものである」(Volkart, *Ibid.*, p.6)。とはいえ既述した事件の影響によって、トーマスの知人だったパークとミラーという別著者名義で刊行されたが、実質的にトーマスの著作と後年認められた『移植された旧世界の国民性』においても、「価値と態度」、「4つの願望」の概念が、「状況の定義」と並んで援用され続けている (Park and Miller, 1921, p. 3, 27, 60)。

- 8) ハワード・S・ベッカーは、『アート・ワールド』25周年記念版に採録の対談中で、これと同様のシカゴ社会学の立場を繰り返している。すなわち、調査されるべき理論図式や仮説群を事前に準備したのち、その図式の視点から現実の社会現象を整理し解釈する先験的な方法ではなく、具体的な社会状況に関与する中で、その現実を説明するために、ふさわしい枠組みを導き出す経験的・実証的な方法を、対比させて主張している。ベッカーの視点では、「経験的、実証的である」ということはこの意味で理解されている (Becker, 2008)。また、ベッカーは、シカゴ系の社会学を特徴づける多くの学派的な呼称ラベルから距離を置いて、自分の立場を単なる「社会学」のものだと繰り返している (Plummer, 2003)。
- 9) トーマスの理論化についての考察は、国内外にある程度多いが、すでに述べた基本的な記録類の欠如もあって、小論も含めて決定的なものは準備しにくい。小論では、マートン (Merton, 1995)、キンボール・ヤング (Young, 1962)、水野 (1979)、佐藤 (1991) などを参照した。
- 10) ただし、筆者が入手できたカリフォルニア大学図書館コレクションの複製 (制作はヒューレット・パッカードとミシガン大学の共同による HP BookPrep 社) では、この部分に、手書きで、E. S. Dummer との書き込みがあった。Ethel Sturges Dummer であろう。
- 11) 概念の一般化は、そのフレーズとしての特徴によっても影響されているだろう。「重要な他者 significant other」よりは「ロール・モデル role model」、「自我の Me 部分」よりは「パブリック・イメージ public image」という方が、いっそうキャッチフレーズとして人口に膾炙しやすい。じっさいこれらは社会学の固有の概念が一般的な表現になった事例であり、いずれもフレーズメーカーとしても高名だったロバート・マートンの造語である。ただしシカゴ学派的な視点から言うなら、ミードらの「重要な他者」を「ロール・モデル」と換言したときに、前者にはあった多くの含意がより調査可能な一定の操作的定義に縮約される、ということになるだろう。他には、「ファッション・リーダー」(カッツとラザースフェルト)、「ゲートキーパー」(デヴィッド・M・ホワイ特) などが、元々は社会学系の概念として使われていたものである。

参考文献

- Baldwin, J. D., *George Herbert Mead: A Unifying Theory for Sociology*, Sage, 1986.
- Becker, H. S., *Art Worlds*, 25th Anniversary Edition, Univ. California Press, 2008 (Original edition, 1982).
- Blumer, H., "Sociological Analysis and the 'Variable'," *American Sociological Review*, Vol. 22: 683–690, 1956, reprinted in *Symbolic Interactionism: Perspective and Method*, Prentice–Hall, 1969.
- Cappetti, C., *Writing Chicago: Modernism, Ethnography, and the Novel*, Columbia Univ. Press, 1993.
- Dewey, J., "The Reflex Arc Concept in Psychology," *Psychological Review*, Vol. 3: 357–370, 1896.
- Goto, M., *George Herbert Mead: A Text-database Analysis of His Writings*, Ph.D. Dissertation submitted to the Graduate School of Sociology at the University of California at Santa Barbara, 1996.
- 後藤将之『コミュニケーション論 愛と不信をめぐるいくつかの考察』中央公論新社, 1999.
- Huebner, D. R., *Becoming Mead: The Social Process of Academic Knowledge*, Univ. Chicago Press, 2014.
- Janowitz, M., "Introduction," in Thomas, 1966: vii–lviii.
- Lewis, J. D. and Smith, R. L., *American Sociology and Pragmatism: Mead, Chicago Sociology, and Symbolic Interaction*, Univ. Chicago Press, 1980.
- Mead, G. H., "Concerning Animal Perception," *Psychological Review*, Vol. 14: 383–390, 1907.
- Mead, G. H., *Movements of Thought in the 19th Century*, Moore, M. A. (Ed.), Univ. Chicago Press, 1936.
- Mead, G. H., *The Philosophy of the Act*, Morris, C. W., et al. (Ed.), Univ. Chicago Press, 1938.
- Merton, R. K., "The Thomas Theorem and the Matthew Effect," *Social Forces*, Vol. 74: 379–424, 1995.
- Miller, D. L., *George Herbert Mead: Self, Language and the World*, Univ. Chicago Press, 1973.
- Mills, C. W., *The Sociological Imagination*, Oxford Univ. Press, 1959.
- 水野節夫「初期トーマスの基本的視座——『ポーランド農民』論ノート（一）」『社会労働研究』、法政大学、25巻69–100頁、1979.
- Park, R. E. and Miller, H. A., *Old World Traits Transplanted*, Harper, 1921 (actually a W. I. Thomas' book published under his fellows' names).
- Plummer, K., "Continuity and Change in Howard S. Becker's Work: An Interview with Howard S. Becker," *Sociological Perspectives*, Vol. 46: 21–39, 2003.

- 佐藤郁哉「主体と構造：トマスおよびズナニエツキの「状況の定義」論をめぐって」『社会学評論』、日本社会学会、41 卷 346-359 頁、1991.
- Thomas, W. I. "The Persistence of Primary-group Norms in Present-day Society and Their Influence in Our Educational System," in *Suggestions of Modern Science Concerning Education*, by Jennings, H. S., Watson, J. B., Meyer, A., and Thomas, W. I., Macmillan, 1917: 159-197.
- Thomas, W. I., *Social Behavior and Personality: Contributions of W. I. Thomas to Theory and Social Research*, Volkart, E. H. (Ed.), Social Science Research Council, 1951.
- Thomas, W. I., *On Social Organization and Social Personality*, Janowitz, M. (Ed.), Univ. Chicago Press, 1966.
- Thomas, W. I. and Thomas, D. S., *Child in America: Behavior Problems and Programs*, A. A. Knopf, 1928.
- Thomas, W. I. and Znaniecki, F., *The Polish Peasant in Europe and America*, Second Edition, Dover, 1958 (Original, 1918-1920).
- Volkart, E. H., "Introduction: Social Behavior and the Defined Situation," in Thomas, 1951: 1-32
- Young, D., "Foreword," in Thomas, 1951: v.
- Young, K., "Contributions of William Isaac Thomas to Sociology," *Sociology and Social Research*, Vol.47: 3-24, 1962.